

麦穂

【巻頭言】

コロナより怖いもの

平良愛香

テレビをつけると連日「コロナ」の字が飛び込んできます。そのたびに、とてもいろいろな事を考えさせられるのです。「どうやって感染を予防したらいいのか」ということはもちろんですが、それ以上に「もう既に自分は感染しているのではないだろうか」という危惧もあります。なにしろ説教・講演・授業・会議で全国を飛び回っているのですから。かといって「では念のために検査をしておきましょう」とはなりにくい。体調が悪いわけでもなく、熱が出ているわけでもない人は、検査をする機会を得にくいのです。それ以上に現在の日本では「念のためにみんな検査しておきましょう」ではなく、「検査して感染が分かったら面倒だから、なるべく検査を控えましょう」と言っているようにすら思えるのです。ある人たちは、「オリンピックを成功させたいために、政府は日本国内の感染者数を低く発表しておきたいのだろう」と言っていますが、そうかもしれないと思わされます。たしかに日本は他国に比べて感染者数が少ないかのように報道されてい

ますが、検査している絶対数が違うのを感じます。数字に表れないだけで、本当は感染者はもっとたくさんいるのだろうな、と。（「感染者や死者の数を少なく見積もるための裏技がなされている」という本当かウソか分からないような噂すら伝わってきます）。

同時に、被害者であるはずの感染者を「犯罪者」のように扱ったり、「濃厚接触はダメだと言っているのに感染してしまった愚かな人たち」かのようなレッテルを貼ったりする風潮があります。感染した人や、その家族、その職場や、診察をした病院さえもバッシングを受けているという、あまりにもおかしなことが起きています。報道を改めて見てみると、「感染防止」については言っていますが、感染した人の生きづらさに寄り添う目線はほとんどありません。「感染者」が完治して「いなくなる」ことだけを目指すあまりに、「今いる感染者」を社会から排除・隔離もしくは封印することで解決しようとはしていないだろうか、ということも感じるので。これは、かつて日本がやった「ハンセン病（元）患者の隔離政策」という差別と何ら変わりません。自分たちの不安を解消するために、一部の人

たちを排除し、隔離していった日本社会。それに抗おうとすると犯罪者として扱われた歴史。わたしたちはその出来事から何を学び、何を反省したのでしょうか。

イエスは、当時、「重い皮膚病」の人たちと出会い、触れ、共に食事をしたと聖書には書かれています。その病気が医学的にどんな病気だったのかは分かりませんが、人々から排除・隔離され、「人間として劣った存在」とレッテルを貼られていたのは事実です。触れるだけで自分にも「けがれ」がうつると信じられていた時代、イエスが選んだの

は隔離や排除や封印ではなく、「共に生きる」という目線でした。もちろん衛生的に「予防」は大切ですし、特に高齢者や持病のある人にとっては、決しておろそかにできないことです。けれど、社会が風潮として「コロナ」を怖がるとき、それが「一部の苦しんでいる人を封じ込めて、さらに生きづらくさせる」ということになってはいないか、考え続けていきたいと思うのです。本当に恐いのは「コロナ」ではなく、弱者・少数者を切る事で自分たちの安全や威信を守ろうとする「社会」なのかもしれません。

(次ページ以降省略)